

令和4年度 学校評価実施報告書

学校名（ 下京中学校）

教育目標

— 志 きらめく — Art Science Toughness

人の心を大切にし、多様な学びを通して持続可能な社会の担い手を育成する

年度末の最終評価

自 己 評 価	教育目標の達成状況、次年度に向けた見直し
	<p>・学校教育目標が教職員の目標だけに終わらず、生徒自身の目標になるように、年度途中に目標の一部を見直した。「人の心を大切にし、多様な学びを通して持続可能な社会の担い手を育成する」の文末を「担い手になる」と変更した。学校独自で進めている振返シート「学びの地図」によって生徒自身が学校教育目標を理解し、自分の状況をメタ認知し、課題解決に向けて取り組むことができた。習得を目指す7つの力〔主体性・忍耐力・協働力・自己表現力・論理的思考力・問題解決力・創造力〕については、いずれの力も昨年度より生徒は身につけた実感していることが学習アンケートより確認することができた。</p> <p>＜学習アンケートの結果 「生徒自身が力を身につけたと思う割合」＞</p> <p>主体性 R3 78.5% → R4 83.2% 忍耐力 R3 77.5% → R4 77.6%</p> <p>協働力 R3 86.4% → R4 90.3% 自己表現力 R3 72.7% → R4 77.0%</p> <p>論理的思考力 R3 72.7% → R4 75.3% 問題解決力 R3 77.7% → R4 77.9%</p> <p>創造力 R3 80.2% → R4 81.7%</p> <p>・次年度に向けては、今年度の取組をより充実させ、7つの力を獲得したことを実感し、教育活動全般に波及するように取り組んでいきたい。</p>

学 校 関 係 者 評 価	学校関係者による意見・支援策
	<p>・目ざす子ども像の一つに「社会のため、自身の夢に向かって、果敢に挑戦できる生徒」を掲げているが、学校運営協議会の理事より、「支えあい」「助けを求める」という要素を目指す子ども像に取り入れた方がいいと助言があった。このことを受けて次年度には、その部分を改訂し、「夢に向かって、支え合い、果敢に挑戦できる自立した生徒」とすることにした。</p> <p>・多様性の具現化策として、校則を見直し、学び方の個別最適化を図った。学校運営協議会の理事からは、方策について理解を得ることができたが、教職員の考え方には依然とするものがあることを指摘された。意識改革の必要性を強く感じるとともに、教職員の研修のさらなる充実を図っていきたい。</p>

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	8月22日	学校評価委員会
最終評価	2月28日	学校評価委員会

(1) 「確かな学力」の育成に向けて 『学力向上プラン』

重点目標

資質・能力が駆動するカリキュラム・デザインの構築

具体的な取組

○社会の一員としての自覚や社会のために尽くす精神の育成

- ・持続可能な社会の担い手を目指し、7つの力（主体性・忍耐力・協働力・自己表現力・論理的思考力・問題解決力・創造力）を培い、社会に貢献できる人材を育成する。
- ・清掃活動等を通して、公共心や公徳心を培い、社会の一員としての自覚を高め、自己の生き方について考える機会を意図的・計画的に設ける。
- ・本校独自の取組である“いのちプロジェクト”等を活用し、生命を尊重する心を育て、命を輝かせ社会で活躍する意欲を高める活動を行う。

○いじめ防止、不登校対策の強化、共生社会の構築

- ・いじめ対策委員会・不登校対策委員会を活用し、S Cや関係機関と連携した細やかな対応を行う。
- ・「学校いじめ防止基本方針」に即し、「見逃しのない観察」「手遅れのない対応」「心の通った指導」を学校組織として適切に行うとともに、いじめアンケートやクラスマネジメントシートを活用した、いじめの予防と早期発見に向けて取組を組織的に実践する。
- ・本校独自の取組である別室「マイプレ」を効果的に活用し、不登校課題の抑制や、引きこもり傾向の生徒の居場所づくりつなげる、生徒への多様な関わりを推進する。
- ・学級や学年の集団づくりを積極的に行い、新たに不登校を生まない体制づくりを進める。
- ・学校運営協議会を活用した「社会に開かれた教育課程」による、地域活動に主体的に参画し、社会貢献する意識と行動できる態度を育成する。

○主体的、自主的、自律的な態度の育成

- ・自己の将来展望を見据え、自分の生き方について深く考え、主体的に行動できる力を身につけるための学習機会を設定したキャリア教育を進める。

○支え合い互いに高め合える集団づくりと規範意識の醸成

- ・人権教育を基盤とした人間関係づくりを通して、多様性を理解する姿勢を涵養する。
- ・人の心を大切にし、多様な考え方や価値観を認め、他を思いやる心、寛容な心を育成するための、道徳の時間や人権学習を中心とした教育活動を充実させる。
- ・生徒指導の3機能を働きさせ、学年・学級活動や部活動等における心の居場所となる集団づくりを行う。
- ・情報モラル教育においては、情報社会における正しい判断や望ましい態度を育てる「心を磨く領域」とセキュリティの知識・技術、健康への意識を育てる「知恵を磨く領域」の内容をバランスよく系統的に指導する。また、インターネット上で生じるさまざまな問題にも、他者を傷つけることがないよう正しい判断力を身に付けさせる。
- ・学校行事を通じ、学級や学年、学校への帰属意識を高めることによって愛校心を醸成する。
- ・学校と家庭との連携により法やルールの重要性を自覚させ、規範意識を育成することによって、「守らされているもの」という意識ではなく、自ら行動できる態度を育てる。
- ・人権侵害やいじめ・性被害等のS N Sトラブルを未然に防止するネット利用のルールづくりを徹底する。
- ・家族や仲間等、周囲の人への感謝する心、公共心や公徳心を育成する。

○生徒会活動の充実における主体的な自治活動の推進

- ・生徒一人一人が生徒会の一員であるという自覚を高め、組織をけん引するものとしての責任、その者を選択する一人としての責任を自覚させ、主体的な集団づくりを行う態度を養う。
- ・一つ一つの学校行事の育てたい力を明確にし、計画的に「生徒にやらせてみる。」活動を繰り返すことで、自立した自治集団を育成する。

○安全な環境整備と心の健康を意識した教育活動の推進

- ・考え方議論する授業、認め励ます評価によって道徳の授業を活性化させる。
- ・地域の人材を活用し茶道体験や和食調理体験、ゆかた登校などの伝統文化や地域の伝統産業を体験し、「ほんもの」に触れる学習を行うとともに、自らも伝統と文化の担い手であることを実感できる取組を充実させ、豊かな感性を醸成する

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・「授業は、学習内容を振り返ったり、まとめたりする場面がある」「授業の中で『分かった』『できた』と感じる場面がある」「将来の夢や目指す目標に向かって、勉強することができている。」
(生徒アンケート)
- ・「子どもは授業が分かりやすいと感じている」「子どもは宿題を家庭で行っている」
(保護者アンケート)
- ・家庭学習時間の記録の推移 (きらめき家庭学習)

中間評価

各種指標結果

- ・「授業には集中して取り組んでいる」 86%
- ・「授業は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」 75%
- ・「分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている」 69%
- ・「授業は、自分の思いや考えをもとに、新しいものを創り出す活動を行っている」 81%
- ・「P C ・タブレットなどを活用した学びを深める授業づくりができている」 98%
- ・「話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」 89%
- ・「自分のことを理解してくれる友達がいる」 93%
- ・「学級では、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている」 75%
- ・「子どもは真面目に授業に取り組んでいる」 91% (昨年度「中間評価」比+4%)
- ・「子どもは授業が分かりやすいと感じている」 67% (昨年度「中間評価」比-10%)
- ・「子どもは宿題を家庭で行っている」 83%

自己評価

分析 (成果と課題)

- ・話し合い活動、P C ・タブレットの活用等の取組が定着してきていることで、学びの深まりや創造性の育成につなげる授業は実現しつつあると言える。86バーセントの生徒が授業にも集中して取り組んでいると答えている。
- ・93%の生徒が自分のことを理解してくれる友達がいると答えており、話し合い活動が考えを広げたり深めたりするだけでなく、生徒の人間関係にも寄与していることがうかがえる。
- ・保護者が授業を参観する機会が戻ってきてていることで、生徒の姿が伝わりやすくなった半面、授業の内容についてはきびしい見方も増加している。子どもは授業が分かりやすいと感じていると答えた保護者が昨年度の中間評価時に比べると10%減少し、67%となった。
- ・探究する姿勢や自分から課題を見つけたり学んだことを生かしたりする自主性には課題が見られる。

	<ul style="list-style-type: none"> 課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組む、互いの意見のよさを生かして解決方法を決める等の項目について生徒の回答は75%にとどまっており、主体的に学習に取り組む活動が十分浸透していないことがうかがえる。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒アンケート、学習アンケート、教育相談等を通した細やかな実態の把握に基づき、なおいつそうの授業改善の努力と同時に、生徒の実態を正確に伝える工夫も必要である。 主体的に学習に向かう姿勢の育成のためにも、生徒が学び方を学ぶという趣旨を、教員も十分理解しながら授業改善や家庭学習への働きかけを進めていく必要がある。教職員研修の機会を捉えて改めて理解を促したい。
	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> 「授業は、学習内容を振り返ったり、まとめたりする場面がある」「授業の中で『分かった』『できた』と感じる場面がある」「将来の夢や目指す目標に向かって、勉強することができている。」 (生徒アンケート) 「子どもは授業が分かりやすいと感じている」「子どもは宿題を家庭で行っている」 (保護者アンケート) ・家庭学習時間の記録の推移 (きらめき家庭学習)
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> 浴衣登校において、3年ぶりに地域とも協力しながらの実施となった。昨年度の振り返りを生かし、着付け練習の際は、「自分で着られるようになる」ような手助けの仕方を心掛けた。レンタル日の各クラスの文化委員は大変よく動けていた。 コロナ禍によって変更・中止になってきた様々な行事が復活するにあたり、PTAや地域の関わり方についての引継がむずかしかったり、新たな関わり方を模索する必要があつたり等、課題も多かった。しかし、多くの行事が復活したことでの子どもの姿を目にする機会が増えたことは非常に喜ばしい。 全国学力・学習状況調査の結果を、学校運営協議会理事の柏木智子先生（立命館大学教授）にも分析を依頼している。11月17日に予定している学校運営協議会において指導をいただくとともに、他の理事の方のご意見も聞きながら、学校活動の改善に生かしたい。

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> 「授業には集中して取り組んでいる」89%（「中間評価」比+3%） 「学校の授業を生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組めている」76% 「授業を受けた後、自分で（振り返りなどを行い）学習を調整できるようになったと思う」67% 「授業を受けることが、学びを深めよう（復習や興味をもったことを調べてみる等）と思うきっかけになる」78% 「授業のきっかけをもとに、自分から学びを深めようと行動している」53% 「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができますか」70% ・「『学びの地図』で、生徒のメタ認知や資質・能力の成長を伸ばすことができた」90% ・「教科で育成した資質・能力を『発揮する場』として総合的な学習の時間を設計できた」100% ・「問い合わせ・対話・振り返りの授業を実践できた」100%
--	--

- ・「他教科と資質・能力のつながりを意識して授業できた」 97%
- ・(生徒自由記述欄より)「勉強しているときはこんなんいつ使うんやろうって思うけど、日常生活で遭遇した時うれしくなるのでこれからも頑張っていきたい。」
- ・「子どもは真面目に授業に取り組んでいる」 90%（「中間評価」比-1%）
- ・「子どもは授業が分かりやすいと感じている」 74%（「中間評価」比+7%）
- ・「子どもは宿題を家庭で行っている」 80%（「中間評価」比-3%）

自己評価	分析（成果と課題）
	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合い活動、PC・タブレットの活用等の取組が定着してきていることで、学びの深まりや創造性の育成につなげる授業は実現しつつある。授業にも集中して取り組んでいると答えていた生徒は「中間評価」よりも3%増加した。 ・「学習を調整できるようになった」「学びを深めようと思うきっかけになる」といった次の学習へつながる行動が、授業によって働きかけられていることを自覚している生徒が半数を超えており、授業が生徒の学びに向かう姿勢の育成につながっていることが分かる。 ・教科の授業改善やカリキュラム・マネジメント、総合的な学習の時間の取組などを通して、生徒が学習の意義を実感できるようなサイクルに向かいつつある。 ・子どもは授業が分かりやすいと感じていると答えた保護者が中間評価時に比べると7%増加した。
	分析を踏まえた取組の改善
	<ul style="list-style-type: none"> ・探究する姿勢や自分から課題を見つけたり学んだことを生かしたりする自主性については一定の改善が見られたが、数値だけを見ると8割までには達しておらず、今後もさらに取り組むべき課題である。授業者も本校独自の取組に確信を持てていない割合も一定数見られるため、教員研修などで引き続き働きかけたい。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策

(2) 「豊かな心」の育成に向けて

重点目標
充実した道徳教育や支え合い高め合える集団づくりを通して、豊かな心を育む教育活動を推進する
具体的な取組
<p>○社会の一員としての自覚や社会のために尽くす精神の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・持続可能な社会の担い手を目指し、7つの力（主体性・忍耐力・協働力・自己表現力・論理的思考力・問題解決力・創造力）を培い、社会に貢献できる人材を育成する。 ・清掃活動等を通して、公共心や公徳心を培い、社会の一員としての自覚を高め、自己の生き方にについて考える機会を意図的・計画的に設ける。 ・本校独自の取組である“いのちプロジェクト”等を活用し、生命を尊重する心を育て、命を輝かせ社会で活躍する意欲を高める活動を行う。

○いじめ防止、不登校対策の強化、共生社会の構築

- ・いじめ対策委員会・不登校対策委員会を活用し、S Cや関係機関と連携した細やかな対応を行う。
- ・「学校いじめ防止基本方針」に即し、「見逃しのない観察」「手遅れのない対応」「心の通った指導」を学校組織として適切に行うとともに、いじめアンケートやクラスマネジメントシートを活用した、いじめの予防と早期発見に向けて取組を組織的に実践する。
- ・本校独自の取組である別室「マイプレ」を効果的に活用し、不登校課題の抑制や、引きこもり傾向の生徒の居場所づくりつなげる、生徒への多様な関わりを推進する。
- ・学級や学年の集団づくりを積極的に行い、新たに不登校を生まない体制づくりを進める。
- ・学校運営協議会を活用した「社会に開かれた教育課程」による、地域活動に主体的に参画し、社会貢献する意識と行動できる態度を育成する。

○主体的、自主的、自律的な態度の育成

- ・自己の将来展望を見据え、自分の生き方について深く考え、主体的に行動できる力を身につけるための学習機会を設定したキャリア教育を進める。

○支え合い互いに高め合える集団づくりと規範意識の醸成

- ・人権教育を基盤とした人間関係づくりを通して、多様性を理解する姿勢を涵養する。
- ・人の心を大切にし、多様な考え方や価値観を認め、他を思いやる心、寛容な心を育成するための、道徳の時間や人権学習を中心とした教育活動を充実させる。
- ・生徒指導の3機能を働かせ、学年・学級活動や部活動等における心の居場所となる集団づくりを行う。
- ・情報モラル教育においては、情報社会における正しい判断や望ましい態度を育てる「心を磨く領域」とセキュリティの知識・技術、健康への意識を育てる「知恵を磨く領域」の内容をバランスよく系統的に指導する。また、インターネット上で生じるさまざまな問題にも、他者を傷つけることがないよう正しい判断力を身に付けさせる。
- ・学校と家庭との連携により法やルールの重要性を自覚させ、規範意識を育成することによって、「守らされているもの」という意識ではなく、自ら行動できる態度を育てる。
- ・人権侵害やいじめ・性被害等のS N Sトラブルを未然に防止するネット利用のルールづくりを徹底する。

○生徒会活動の充実における主体的な自治活動の推進

- ・生徒一人一人が生徒会の一員であるという自覚を高め、組織をけん引するものとしての責任、その者を選択する一人としての責任を自覚させ、主体的な集団づくりを行う態度を養う。
- ・一つ一つの学校行事の育てたい力を明確にし、計画的に「生徒にやらせてみる。」活動を繰り返すことで、自立した自治集団を育成する。

○安全な環境整備と心の健康を意識した教育活動の推進

- ・考え方議論する授業、認め励ます評価によって道徳の授業を活性化させる。
- ・地域の人材を活用し茶道体験や和食調理体験、ゆかた登校などの伝統文化や地域の伝統産業を体験し、「ほんもの」に触れる学習を行うとともに、自らも伝統と文化の担い手であることを実感できる取組を充実させ、豊かな感性を醸成する。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・「自分には良いところがあると思っている」「夢や目標をもって生活できている」「自分の気持ちを理解してくれる友達がいる」(生徒アンケート)
- ・「他者（多様性）を認め、思いやる指導・自分を大切にし、自己肯定感を高める指導・生徒の心に寄

り添い、いじめを見逃さない指導ができている」「ルールを守る態度の育成ができている」

(教職員評価)

・「子どもは、自分を大切にした行動・仲間を大切にした行動ができている」(保護者アンケート)

中間評価

各種指標結果

- ・「自分には良いところがあると思っている」75%
- ・「夢や目標をもって生活できている」70%
- ・「自分の気持ちを理解してくれる友達がいる」93%
- ・「他者（多様性）を認め、思いやりの指導ができている」97%
- ・「自分を大切にし、自己肯定感を高める指導ができている」96%
- ・「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」96%
- ・「ルールを守る態度の育成ができている」89%
- ・「子どもは、自分を大切にした行動ができている」94%
- ・「子どもは、仲間を大切にした行動ができている」95%

自己評価

分析（成果と課題）

- ・コロナ禍ではあるが、自己を肯定的にとらえている生徒が昨年と比較して2%ではあるが増えている。また、「自分の気持ちを理解してくれる友達がいる」の質問に肯定的な回答をした生徒も5%増加した。
- ・規範意識については、前年度に比べ「ルールを守る態度の育成ができている」と回答した教師が6ポイント減っている。実際に自転車通学に関する地域からの苦情も昨年度に比べ多い。生徒の規範意識について教職員の課題意識が必要である。一方、「他者を大切にし、自己肯定感を高める指導ができている」や、「他者を認め、思いやりの指導ができている」の質問に肯定的な回答をした教員はともに増えており、教員は生徒に寄り添った指導を心掛けていたことがわかる。
- ・不登校を生まないための対策として、生徒の居場所づくりをねらいとした「良いところをみつけて伝え合おう。」という取り組みを行った。これについては、生徒・教職員とも良好な意見が寄せられ、こうした取り組みが生徒の自己肯定感を高める指導に寄与したのではないかと考える。
- ・情報モラル教育においては、目立った補導問題は発生していないが、インターネットやSNSに関わる嫌がらせや人間関係のトラブルは少なからず見られた。適宜指導は行ってきたが、未然に防ぐための手立てを考える必要がある。

分析を踏まえた取組の改善

- ・規範意識を高めることを狙いとした教職員の意識改革及び指導改善の対策を生活向上部を中心に行う。「生徒の心に寄り添う。」ことと「規範意識を育てる。」ことは実際の指導の中で真逆のアプローチとなることも少なくないため、きめ細やかな指導が行われるようOJTなどを活用し、効率に職員研修を進めたい。
- ・人の心を大切にし、多様な考え方や価値観を認め、他を思いやりの心、寛容な心を育成するため、効果的な人権学習が行えるよう準備をすすめる。
- ・情報モラル教育については、非行防止教室や外部リソースを活用し、インターネット上に潜むリスクについての指導を行っていく。

	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標
	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分には良いところがあると思っている」「夢や目標をもって生活できている」「自分の気持ちを理解してくれる友達がいる」「思ったことをきちんと人に伝えられている」 ・「他者（多様生）を認め、思いやる指導・自分を大切にし、自己肯定感を高める指導・生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができる」「ルールを守る態度の育成ができる」 ・「子どもは、自分を大切にした行動・仲間を大切にした行動ができる」

最終評価

	(中間評価時に設定した) 各種指標結果
生徒アンケートより	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分には良いところがあると思っている」81% 「夢や目標をもって生活できている」74% 「自分の気持ちを理解してくれる友達がいる」96% 「思ったことをきちんと人に伝えられている」86%
教職員アンケートより	<ul style="list-style-type: none"> ・「他者（多様生）を認め、思いやる指導」78% 「自分を大切にし、自己肯定感を高める指導」92% 「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができる」97% 「ルールを守る態度の育成ができる」96%
保護者アンケートより	<ul style="list-style-type: none"> ・「子どもは、自分を大切にした行動ができる」91% 「子どもは仲間を大切にした行動ができる」94%
自己評価	<p>分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「自分には良いところがあると思っている」は6ポイント、「夢や目標をもって生活できている」は4ポイント前期を上回った。「自分の気持ちを理解してくれる友達がいる」は3ポイント前期を上回った。「思ったことをきちんと人に伝えられている」についても7ポイント前期を上回る結果となった。前年度と比較し、自己有用感を高めることができたといえる。一方、保護者アンケートでは「子どもは、自分を大切にした行動ができる」が3ポイント、「子どもは仲間を大切にした行動ができる」で1ポイント下落した。 ・教職員アンケートでは「他者（多様生）を認め、思いやる指導」が14ポイント上昇した。12月の人権学習に向けて教職員で人権についての研修会を2度行ったことが、教職員の指導意識向上に寄与したと思われる。「自分を大切にし、自己肯定感を高める指導」が4ポイント下落し、「ルールを守る態度の育成ができる」が7ポイント上昇したことについては、規範意識の育成を重点的に進めてきたことが実際に教職員の意識改革につながったことが表れていると考えられる。

	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の自己有用感や学校生活に対して前向きに取り組む態度は総合的に高まる結果となった。人の心を大切にし、多様な考え方や価値観を認め、他を思いやる心、寛容な心を育成するため、人権について教職員研修を行い、効果的な人権学習を実施できた。 ・生徒会活動の充実における主体的な自治活動の推進については昨年度に比べ多くの学校行事を行うことができたが、ここ数年間中止されてきた学校行事を実施することは生徒・教職員双方にとって想像以上に負担が大きかった。その結果余裕をもって生徒に活動をさせられことができず、生徒の主体性を育む指導については来年度の課題となった。 ・不登校を生まないための取組みとして、1月に家庭教育学級のとして講師を招き、「思春期の生徒との関わり方」をテーマに研修会を行った。参加した教職員や保護者には好評であったので、次年度も実施したい。
学校 関 係 者 評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の自己肯定感が高まっていることは評価できる。学校行事がうまく機能したのではないか。 ・不登校生徒にどのように関わっていくか、不登校生徒を減らすことも大切なのかもしれないが、どのように関わっていくのか教職員で研修を進めてもらいたい。

(3) 「健やかな体」の育成に向けて

	<p>重点目標</p> <p>自他を大切にし、社会との関わりの中で、健全な心身の成長につなげる指導の充実と環境の整備</p> <p>具体的な取組</p>
	<p>○望ましい生活習慣の確立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康を保持し規則正しい生活の習慣を確立するため、睡眠の重要性の啓発と、飲酒・喫煙・薬物乱用の有害性について正しい知識と危険な行為から身を守る指導を徹底する。 ・新たな感染症をはじめとする病気やけがに対して、その原因と予防策を正しく理解し、リスクを自ら判断して行動ができる実践的態度を育成する。 ・性について、正しい知識と適切な行動に関する指導を人権学習とクロスさせながら充実させる。 ・家庭と連携・協働しネット依存による学習や睡眠時間への影響の啓発と、使用時間の制限等のルールづくりとそのルールを守る態度を育成する。 ・運動やスポーツに親しみ、健康を大切にする態度を育てる。
	<p>○自己指導能力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導の三機能を全ての教育活動ではたらかせ、生徒の人格のより良い発達を目指す。 ・生徒が自分（たち）で考えて決めて実行する“自己決定の場”を意識的に設ける。 ・生徒一人一人をかけがえのない存在として捉え、他者のとの比較ではなく生徒の個別性や独自性を大切にした“自己存在感”を感受する関わりを意識的に行う。 ・教職員と生徒、生徒と生徒が互いに尊重し、理解し合える“共感的な人間関係”“好ましい人間関係”を構築させる。
	<p>○保健体育の授業及び部活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保健体育授業の時間確保と運動環境を整備する ・部活動時間のあり方を見直し、適切な活動時間と家庭・地域で過ごす時間を確保し、心身の健康を増進し、自尊感情を高めることができる充実した時間となるように取り組む。

○学習環境の充実

- ・保健室、SC 室等の心理的な“空間”の整備と、“空間”を効果的に活用した心理的変化の早期発見の場となる運営を行う。
- ・不登校傾向の生徒の心の居場所となる別室指導の体制を充実させ、心の成長とコミュニケーション能力の育成を図る。
- ・施設などの安全点検と迅速な修理修繕による安全整備を実施する。

○安全教育の充実

- ・危機管理マニュアルに基づいて、研修や訓練を行い、家庭との共通理解を図る。
- ・生徒自身が学校や地域での危険を予測し回避できるよう、災害発生時に適切に行動できる学習を充実させる。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・「朝食を毎日食べている」「毎日よく眠れている」「訳もなく腹が立ってくることがある」
(生徒アンケート)
- ・「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」「規則正しい生活習慣の確立ができる」と(教職員評価)
- ・「子どもはルールや決まり事を守ることができている」(保護者アンケート)

中間評価

各種指標結果

- ・「朝食を毎日食べている」 91%
- ・「毎日よく眠っている」 77%
- ・「訳もなく腹が立ってくることがある」 26%
- ・「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」 96%
- ・「規則正しい生活の習慣の確立ができる」と 64%
- ・「子どもはルールや決まり事を守ることができている」 87%

自己評価

分析 (成果と課題)

- ・生活習慣についての課題は限定的であるが、心理的な不安を抱えている生徒は多くいる。
- ・感染症に対しては、マスク着用、黙食等の感染対策を継続して徹底することができた。
- ・ルールを逸脱する問題行動は少ないが、友人関係の不調や、登校への意欲の低下がきっかけとなり、不登校の状態になる生徒が増えてきている。
- ・不登校の生徒の別室等での対応等を進めているが、ただ登校しているだけの状態で、あまり生徒の心情に寄り添った指導ができていない課題がある。
- ・平日に、部活動の活動時間を短縮し、16時45分活動終了、17時00分完全下校の体制を4月より開始したが、生徒、保護者の大きな混乱もなく、一定の理解を得ている。
- ・AED を使用する事案や、両手を骨折する大きな事故が校内で発生し、教職員の安全な環境づくりを再度徹底する必要がある。

分析を踏まえた取組の改善

- ・心理的な不安を早期に発見しケアしていくために、教育相談の充実を進めている。
- ・感染者の数は生徒全体の2割に近い数であるが、校内での感染拡大のわずかで、対策の効果が出ている。今後も気を緩めることなく感染対策の徹底し、ウィズコロナの生活を習慣化させる。
- ・不登校傾向の生徒が別室に登校する際には、生徒とのコミュニケーションを大切にしながら、

	<p>生徒自身が活動計画を立て、教職員がそれを支援し自己肯定感を高める適切な指導に努める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3年生の学年において、生徒の誕生日を教職員が把握し、誕生日の際には祝福の言葉かけを行い、自己存在感を高めるように取り組んだ。 ・平日の部活動の終了時間を早めしたことによってできた時間を、有効に活用できるように家庭学習の方法を改善したが、より改善を進める必要がある。 ・大きな事故が発生したことから、急遽、教職員の HANA モデルに沿った普通救命講習を実施し、安全指導の充実を図った。
	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「朝食を毎日食べている」「毎日よく眠れている」「訳もなく腹が立ってくることがある」 ・生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」「規則正しい生活習慣の確立ができる」「子どもはルールや決まり事を守ることができている」
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マスク着用の期間が長引いていることを懸念している。生徒の表情が分かりにくいと思われる所以、これまで以上に生徒へのきめ細やかな観察をお願いしたい。また、マスクによって心にフィルターをかけている生徒もいる。屋外での活動時でもマスクを外せない生徒も多いと聞くが、熱中症対策の面だけでなく、安心してマスクを外せる環境づくりが必要である。 ・目指す子ども像「社会のため、自身の夢に向かって、果敢に挑戦できる生徒」について、自律したたくましい生徒を育てたいという学校の意向は理解できるが、ケアの視点をもつことが大切だ。人に適切に頼る、いざという時には SOS が出せる、いつも 100%を目指す必要はない等、生徒への要求のレベルを上げ過ぎず、人の関係づくりを大切にしていくべきである。適度な依存がなければ、本当の自律につながらないことを考慮して、目指す子ども像の見直しを進めて欲しい。 ・コロナ禍の影響が続いているが、家庭や地域が子供を見守る姿勢を持ち続け、健全育成に向けて学校と連携することが大切である。

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒アンケート 「朝食を毎日食べている」 91 % 「毎日よく眠っている」 75 % 「訳もなく腹が立てくることがある」 18 % ・教職員アンケート 「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができる」 実現度 97 % 重要度 100 % 「規則正しい生活習慣の確立ができる」 実現度 89 % 重要度 100 % ・保護者アンケート 「子どもはルールや決まり事を守ることができている」 86 %
自己評価	<p>分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食育の一環として、昼の校内放送を利用した食について啓発活動を進め、感染予防のための昼食時の黙食の時間を効果的に活用した。 ・今年度もコロナウィルスの感染者が多く校内全体で 200 名近くに上った。感染経路はほぼ学校外でからあり、校内で感染が広がることはほとんどなかった。教育活動の工夫や、校内の喚起や消毒の感染対策の効果があったと思われる。 ・インフルエンザの爆発的な流行があり、学年閉鎖等の措置を行うことがあった。大寒波とも重

	<p>なり喚起が不十分だったことが、感染を拡大させたと思われる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SNS の不適切な使用によるトラブルが複数あった。情報モラル教育を充実させる必要性と、家庭からの働きかけが重要であることを再認識した。 ・学年末に薬物乱用防止や性教育についての啓発学習を行ったが、長期休業前の早い時期に実施すること必要性を感じた。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナは収束に向かい一つあるが、日常の喚起や消毒は、今後も継続していきたい。 ・マスク着脱については、個人判断となるが、発熱等の体調不良等の把握を適切に行い、無理して学校にとどめることがないように適切に指導を進めていく。 ・自傷行為等の件数は、今年度はかなり減少したが、不登校傾向の生徒の増加は続いている。早い段階で異変を気づくに対応をすること以外の、日常の生活が学校に居場所を感じ、安心して登校できる学校づくりを進めていく。校内独自の別室制度「マイプレ」のより効果的な活用を研究し、GIGA 端末を活用した学習支援を中心とした不登校傾向生徒への関わりを充実させる。 ・教室での GIGA 端末の不適切な使用も何度かあったが、ケータイ教室・情報モラル教室・非行防止教室等を充実させ、SNS の正しい利用を指導するとともに、情報活用能力の育成を図る。 ・部活動の完全下校時間を通年で 17 時にしたが、予想以上に生徒・保護者の理解を得ることができた。また、生徒の部活への集中度が増し、活動自体が衰退している感もなく 1 年を終えることができた。
学校 関係 者評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感染拡大防止のための換気を行いながら防暑・防寒の対策として、服装の決まりに幅を持たせ柔軟に対応していることは、生徒や保護者からの学校への信頼につながっている。 ・校則の見直しを図る中で、服装や頭髪の指導しかたも変化していく必要がある。学校は変化を嫌い、そもそも目的を見直すことなくこれまで通りの指導を進めてきた。生徒の健全育成の観点からも、生徒自身が考え行動し、頭髪や服装もある程度柔軟に対応し、多様性を認め寛容な態度で生徒を支援する体制に移行していくべきである。

(4) 学校独自の取組

	<p>重点目標</p> <p>様々な学習や人とのつながりを意識した取組を推進する</p>
	<p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ○総合的な学習の時間において、「人権学習」「生き方学習」「伝統文化体験学習」「探究学習」の 4 つの分野のそれぞれでキャリア教育の視点をもち、自己の生き方を考える取組の実践 ○キャリア教育の視点に立った特別活動・生徒会活動の実践 ○地域人材を活かし、浴衣登校や和食調理体験等の伝統文化体験を充実させ、自分たちの住む町の次代の担い手としての自覚を醸成する。 ○キャリア・プランニング能力の育成を目指した計画手帳（きらめき手帳）の指導を充実させ、主体的に時間を設計し、見通しを持ち、自ら調整しながら計画的な生活を営む力を育成する。 ○各教科「縦持ち」で学年をまたいだ教科担任制を実施、全校生徒を全教職員で指導する体制を作る。 ○担任を中心に毎日のきらめき家庭学習点検し、生徒の興味関心を把握し、コメントをつけたり会話

のきっかけを探したりする。

○マイプレイスでの学習状況を常に共有し、教室に入れない生徒の現状を全教職員が把握する。

○「学びの地図」を書くことで、つけたい力や目標と、毎日の学習活動とのつながりを生徒自身が自覚できるよう促す。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・「授業で学んだことが他のことにも生かされている」「将来の夢や目ざす目的に向かって勉強することができている」(生徒アンケート)
- ・「探究学習を充実させた指導・伝統文化体験学習を充実させた指導ができている」(教職員評価)
- ・「子どもは体験を通して伝統文化を理解し大切にできている」「子どもは手帳を活用し計画的な生活ができている」(保護者アンケート)
- ・その日の学習内容、その時期の学習内容に関連した内容や、学習した内容から連想された内容のきらめき学習が継続的になされたり深められたりしているか。(きらめき家庭学習)
- ・複数の取り組みや教科と、身についた力とを結びつけられているか。(学びの地図)

中間評価

各種指標結果

- ・「夢や目標を持って生活できている」 70%
- ・「地域や社会の出来事に関心を持っている方だと思う」 63%
- ・「授業には集中して取り組んでいる」 86%
- ・「授業は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」 75%
- ・「授業は、自分の思いや考えをもとに、新しいものを創り出す活動を行っている」 81%
- ・「分かった点や、よくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができている」 69%
- ・「子どもは体験を通して伝統文化を理解し、大切にできている」 81%
- ・「子どもは宿題(きらめき家庭学習)を家庭で行っている」 83%

自己評価

分析(成果と課題)

- ・将来への見通しや、地域社会への関心を持って学習に向かっている生徒の割合は60～70%にとどまっている状態であり、学習の成果を生かす段階にまで達している生徒はそれほど多いとは言えない。
- ・授業そのものには集中して取り組んでいると答える生徒が86%に上るとともに、課題解決や創造的な活動についても75～80%と、授業中に関しては非常に積極的に取り組んでいる生徒が多い。
- ・授業をはなれても主体性が保たれているかについては疑問が残る。次の学習につなげることができないと答える生徒は69%にとどまっている。
- ・伝統文化体験に関する保護者の関心は高く、好意的な受け止めが多い。
- ・83%の保護者が家庭で宿題(きらめき家庭学習)を行う姿を目に留めており、学校の指導方針への理解は深いといえる。

分析を踏まえた取組の改善

- ・後期に始まった探究活動(ASTタイム 総合的な学習の時間)の取組を通して、地域社会への関心や将来へのイメージを膨らませる働きかけを行っている。若い起業家の方たちや、事業所の方に触れる機会を多く設定することで、生徒の興味関心を高めたいと考えている。
- ・日々のきらめき家庭学習の取組を通して、学習の振り返りを習慣づけることを通じて、授業で

	<p>学んだ内容から思い起こすことを記録したり、学んだ内容から興味のあることを調べたりすることで、次の学習につなげるという学び方が身につくことを狙っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者にもきらめき家庭学習に取り組む生徒の様子を見ていただくことで、学習が授業だけにとどまるのではなく、9教科を越えて生徒の興味関心に結びつき、広がったり深まったりする様子を目の当たりにしていただきたいと考えている。
	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「授業で学んだことが他のことにも生かされている」「将来の夢や目ざす目的に向かって勉強することができている」(生徒アンケート) ・「探究学習を充実させた指導・伝統文化体験学習を充実させた指導ができている」(教職員評価) ・「子どもは体験を通して伝統文化を理解し大切にできている」「子どもは手帳を活用し計画的な生活ができている」(保護者アンケート) ・その日の学習内容、その時期の学習内容に関連した内容や、学習した内容から連想された内容のきらめき学習が継続的になされたり深められたりしているか。(きらめき家庭学習) ・複数の取り組みや教科と、身についた力を結びつけられているか。(学びの地図)
学校 関 係 者 評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会や参観日の機会を捉えて、きらめき家庭学習の内容を見ていただけるよう、廊下の目立つ場所に掲示してあるのも、生徒に学校のねらいを理解させる一助となっている。 ・A S T タイムにおいて、中学生の学ぶ姿が見られるのは企業側にとっても良い刺激になっている。京都に拠点を置く企業の中に世界を相手に仕事をしているところがあることを、若い世代に直接伝える機会となった。

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学校の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思う」 9 2 % ・「授業で学んだ内容が、将来役立つと思う教科」 国語 6 2 %、社会 5 5 %、数学 4 5 %、理科 2 8 %、音楽 1 4 %、美術 1 1 %、保育 4 8 %、技家 5 7 %、英語 7 1 % ・「『きらめき手帳』を使うことによって、見通しをもって行動できている」 7 5 % ・「『きらめき家庭学習』に取り組むことによって、家庭学習を行うことができている」 7 2 % ・「『学びの地図』では今の自分について客観的にとらえることができた」 7 7 % ・「総合的な学習の時間 (AST) を通して、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組めている」 8 9 % ・「子どもは体験を通して伝統文化を理解し大切にできている」 8 1 % (「中間評価」比±0) ・「子どもは手帳を活用し計画的な生活ができている」 5 2 % (「中間評価」比-3%)
自己 評 価	<p>分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合的な学習の時間 (AST) の取組みが、生徒自身の実感として自発的で将来にも役立つものとして自覚され始めている。 ・授業に集中して取り組めているだけでなく、将来にも役立つものとして 9 2 % の生徒に認知され始めている。 ・伝統文化への理解のために本校の取組みが寄与していることを 8 1 % の保護者が好意的に受け止めている。

	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取組として2年目の『学びの地図』、今年度初めて取り組み始めた『きらめき家庭学習』の効果を実感している生徒は7割にとどまっている。いずれも学びに向かう人間性に関わる重要なねらいをもつ取り組みであるが、教職員も含めてねらいの真意が十分に伝わっていない節がある。教職員への研修も含めて、十分に周知を進めながら続けていきたいと考えている。 ・『きらめき手帳』の活用は、単なるスケジュールの記録にとどまらず、自己調整力の育成を目指したものとしてねらいを明確にし、生徒にも活用を進めていきたい。
学校 関 係 者 評 価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不登校の生徒への働きかけが、地域や保護者からも何かできないか。学校に来ている生徒だけでなく、来ることができない生徒やその保護者に対しても、協力できることがあれば協力を惜しまない。 ・学校独自の取組みや、様々な成果を知ると、他校との比較にも興味がある。

(5) 教職員の働き方改革について

	<p>重点目標</p> <p>時間外勤務時間の削減と業務の効率化・適正化の推進</p>
	<p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間外勤務時間の削減に向けた教職員の意識改革を図るため、他校の取組や成果を伝達する。 ・業務の効率化を図るため、職員会議等の資料のペーパレス化や、会議の精選を行う。 ・ICT機器を効果的に活用し、生徒・保護者に対するアンケートを効率的に集計し時間短縮を図る。 ・定期テスト最終日の部活動を停止し、採点業務の時間確保を進める。 ・三者懇談会や家庭訪問を原則勤務時間内に実施する。 ・事務職員や管理用務員が、学校行事の運営や配布物印刷等の役割を担い、教員の負担軽減を行う。 ・校務支援員、観察実験アシスタント、学びのパートナー、学生ボランティアを活用し、授業や部活動、生徒支援の充実を図るとともに教職員の負担軽減を行う。 ・部活動指導員や外部コーチを活用し、部活動指導の充実を図ると同時に、顧問の負担軽減を行う。 ・部活動ガイドラインの徹底を図り、効果的な部活動を行うと同時に、顧問の負担軽減を行う。 ・留守番電話機能を活用し、保護者に対して勤務時間の理解と業務時間の縮小を図る。(18:30以降は電話の発・受信を行わない。) ・年休取得促進と健康増進の推進を図る。
	<p>(取組結果を検証する) 各種指標</p> <p>「仕事へのやりがいと挑戦する意欲の喚起」「自己の健康管理」(教職員評価) 教職員の超過勤務時間実績</p>

中間評価

	<p>各種指標結果</p> <p>「仕事へのやりがいと挑戦する意欲の喚起」 61 % 「自己の健康管理」 64 %</p>
自己評	<p>分析 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若手の教職員が増え、教材研究や分掌業務を効率的に行うことができず、超過勤務が目立った。 ・学生ボランティア 14名 理科実験アシスタント1名 部活動指導員2名 外部コーチ2

評価	<p>名、ICT・総合育成・校務支援員など、できるだけ多くのスタッフを活用し、勤務時間削減に取り組みつつ、授業改善を行える環境づくりを推進している。</p> <ul style="list-style-type: none"> 日々の目標退勤時間を設定し、周知を行ってきたが、個々の目標達成に対する意識度合いは高くなない。 通年部活動17時終了、18時半以降は留守番電話対応という変更を行った。全体として退勤時間は早くなっている傾向にあるが、超過勤務について課題のある教員は一定数存在する。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> 超過勤務過多の課題がある教員に対し、適宜指導を行う必要がある。 会議時間短縮や行事計画に工夫を行い、業務の効率化を行う。 仕事へのやりがいが高めるために、管理職からの労いや承認の適切な声掛けを意識的に行う。
	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <p>「教職員の表情はイキイキしていると思いますか。」（学校関係者アンケート） 「仕事へのやりがいと挑戦する意欲の喚起」「自己の健康管理」（教職員アンケート）</p>
	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> 教職員の労働環境改善に努めており、全体として超過勤務が削減できていることは評価できる。 部活動時間削減や、留守番電話時間設定についても保護者の理解を得られているようであるので、引き続き働き方改革を推進してもらいたい。

最終評価

自己評価	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <p>「教職員の表情はイキイキしていると思いますか。」…95% 「仕事へのやりがいと挑戦する意欲の喚起」…68% 「自己の健康管理」…56%</p>
	<p>分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <p>「仕事へのやりがいと挑戦する意欲の喚起」において、やりがいを感じている教員が、前期60%だったところを後期は68%に増えた。一方、「自己の健康管理」ができたと感じている教員は前期66%だったところ、後期は56%に減った。意欲的に職務へ向き合う教員が増えたことは評価できるが、依然超過勤務において45時間を超える職員も多く、教職員の働き方に課題が残る。</p>
学校関係者評価	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>やりがいや意欲が増えるほど労働時間が増えていくのは自然なことなのかもしれないが、それを意識的に変えていくことが働き方改革を進めるに当たり求められていることは言うまでもない。会議時間の短縮、組織としての業務の均等化、個人における日々の業務均等化など、教職員の意識改革を行っていかなければならない。</p>

(6) いじめの防止等についての取組に向けて

重点目標
人の心を大切にし、人権尊重の精神に富んだ生徒の育成を図る
具体的な取組
「学校いじめの防止等基本方針」に同じ
(取組結果を検証する) 各種指標
<p>① 全教職員が学校いじめの防止等基本方針の内容を理解し、組織的対応に努めている。</p> <p>② 学校のいじめ対策委員会のメンバーを児童生徒に紹介している。</p> <p>③ 年2回実施の教育相談アンケートの以下の項目に該当する生徒への聞き取り調査を行い、実態の把握をした後、適切な指導を行う。また、教職員アンケートより指導体制についての検証を行う。</p> <p>「学校生活で嫌なことがある」・「友人からよくからかわれたり、嫌なことを言われたりする」 「自分のクラスは過ごしやすいと思う」・「友人関係で悩んでいることがある」(生徒アンケート) 「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導ができている」(教職員アンケート)</p> <p>④ 児童生徒・保護者の訴え（アンケート結果含む）や相談内容を共有している。 保護者や学校運営協議会等に、学校いじめの防止等基本方針や学校の取組を説明・周知している</p>

中間評価

各種指標結果
① 学校いじめの防止基本方針』を全教職員で共通理解し組織的に対応する体制は整えた。 教職員アンケート「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導」 重要度：「重要である」 100% 保護者アンケート 「学校は安全で安心できる環境整備がされている」 「そう思う」 93%
② いじめ対策委員会のメンバーは、学校だより等を通して生徒・家庭・地域に対して紹介した。 教育相談や懇談会を通して、「悩み事があれば、いつでも相談できる先生がいる」ことを生徒・保護者に周知した。
③ 生徒アンケート結果より *アンケート内容は年度当初の項目から 「学校に行くのは楽しい」 85% 「クラス内で気になることがある」 23% 「自分のことを理解してくれる友達がいる」 93% 「嫌なことがあると我慢してしまうことが多い」 55%
④ 生徒や保護者からの相談内容を共有し、組織的に対応した。 教職員アンケート「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導」 実現度：よくできている 39%、大体できている 57% いじめ防止基本方針について、HPや学校便りを通して保護者や学校運営協議会に周知した。

自己評価	分析（成果と課題）
	・「学校いじめの防止基本方針」に基づき、生徒の変化を見逃すことなく、早期にいじめ対策委員会を中心として組織的な対応ができた。 ・いじめアンケートを適切に活用し、教職員間で情報を共有し、迅速に聞き取りや指導を行い、

	<p>初期の段階での解決を図ることができた。また、保護者とも連携し、解決後の様子もしっかりと観察することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> いじめの認知件数は多くはなかったが、SNS の不適切な使用に関する事例が課題である。生徒自身からではなく、保護者からの連絡により事案が発覚することがあった。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒の様子の観察をしっかりと続け、トラブルの早期発見に努める。コミュニケーションの課題のある生徒や、発達に課題のある生徒が、いじめの当事者にならないように、教職員の共通理解を徹底させる。 全ての教育活動を通して生徒指導の三機能の視点をもち、いじめの未然防止をはじめとする指導を進めていく。また、トラブルについて、保護者からではなく、生徒自ら教職員に相談できるような体制づくりや、意思表示できる力を身につける必要がある。 懇談会やPTA活動・学校運営協議会を通して、学校の現状を適宜伝え、課題を共有し、連携して生徒の観察や、心の育てる教育を進めていく。 系統立てた情報モラル教育を充実させるために、小学校との合同研修会を活用しSNSに関する保護者啓発誌を作成する。
	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <p>生徒アンケート：「学校に行くのは楽しい」「クラス内で気になることがある」「自分のことを理解してくれる友達がいる」「嫌なことがあると我慢してしまうことが多い」</p> <p>保護者アンケート：「学校は安全で安心できる環境整備がされている」</p> <p>教職員アンケート：「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導」</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> 落ち着いた環境づくりができている。今後もいじめの未然防止、早期発見に向けて尽力してもらいたい。重大ないじめ事案が全国では発生しているが、対岸の火事と考えず、つねに緊張感をもって生徒の心情理解に努める必要がある。 生徒が教職員に適切に頼れる体制づくりを進めるとともに、周囲に頼る力は、今後、より必要とされる大切な力であること教職員も共通理解を進めなければならない。

最終評価

	<p>(中間評価時に設定した) 各種指標結果</p> <p>生徒アンケート：「学校に行くのは楽しい」 99% 　　「クラス内で気になることがある」 16% 　　「自分のことを理解してくれる友達がいる」 96% 　　「嫌なことがあると我慢してしまうことが多い」 47%</p> <p>保護者アンケート：「学校は安全で安心できる環境整備がされている」 95%</p> <p>教職員アンケート：「生徒の心に寄り添い、いじめを見逃さない指導」</p> <p style="text-align: right;">実現度 97% 重要度 100%</p>
自己評価	<p>分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> いじめ事案の件数は多くはないが、原因究明が難しい事案も多く、未然防止の日常の集団作りの大切さを実感した。「学校いじめ防止基本方針」に基づき、早期にいじめ対策委員会を中心として組織的な対応を行ったが、コロナ禍が影響する人間関係の希薄化を感じることも多く、相手の表情や態度から、相手の気持ちを汲み取る関わり方を生徒に学ばせる必要性を感じた。

	<ul style="list-style-type: none"> いじめ事案の指導の中で、被害側の立場に立つことが十分できず、被害・加害の両方の生徒、保護者の理解を得るために後手に回ることがあった。些細な事案であっても、生徒、保護者の意向を十分に汲んだ指導を行い、被害側の心情の理解を最優先に対応する力量の向上を図る必要がある。
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> これまでの反省を生かし、教育相談の時間や、各種アンケート調査を確実に実施し、いじめの未然防止、早期解決に努めることができた。ただ、生徒や保護者の困りに寄り添えていない関わりもあり、問題解決に時間を要することがあった。情報共有だけでなく、きめ細やかな生徒の様の観察や、生徒・保護者が何を求めているのかを共通理解する必要がある。 生徒の学校内で居場所づくりを進めるために、校内プロジェクトとして「居場所づくり」の教職員チームを立ち上げ、これまでの教職員によるいいところを褒める取組だけでなく、生徒同士のいいところを伝え合う活動等も行った。また、学年によって、生徒の誕生日を教職員で共有し、誕生日に「おめでとう」の声を掛ける取組を行った。いじめ未然防止として、日常の温かな関わりを再認識し、生徒と生徒、生徒と教職員の共感的に人間関係の育成に向けて取り組むことができた。
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <ul style="list-style-type: none"> 「学校の負の側面である、同質化を求める異質を排除するような雰囲気（文化）を改め、多様性を寛容に受け止め、互いをリスペクトする文化を育てる必要がある」と、学校運営協議会理事よりご指摘いただいた。教職員の無意識的な関わりによって、生徒が居場所を感じることができず、他を傷つけるような行動が起きないように、教職員の意識を変えていく必要がある。 「学校いじめ防止基本方針」についての理解を深め、生徒・保護者が安心できる対応を心掛けが必要がある。いじめが起こること、学校が完璧に対応できないこともあることは、保護者は理解しているが、被害者側の安心につながる法や制度を理解して対応してもらいたい。